

主 論 文 の 要 約

論文題目 海外の成人日本語教育機関における教師と学習者の教室観

氏 名 内山 喜代成

論 文 内 容 の 要 約

本研究は台湾の民間の成人日本語教育機関である補習班の教室を調査・分析したものである。

第1章では本研究の背景と目的を述べた。本研究は筆者が補習班に勤務していた際の個人的な経験を出発点としている。補習班では職業や年齢、学習目的が異なる多様な学習者が同じ教室で学習を行う。また、民間の教育機関という性格から、学習者を継続的に確保することも求められる。そのため、教師には多様な学習者が学習を継続できる教室環境を整えることが求められる。しかし、養成課程などで形成された教師の教育観と学習者の学習観などとの間に葛藤や摩擦が生じることも少なくない。本研究はこれらの葛藤や摩擦の緩和の一助となることを目的としている。以上のような研究の背景を示した上で、まず、台湾の成人日本語学習者の状況についてまとめた。次に、台湾の日本語教育の一翼を担っているにも関わらず、現在まで、あまり研究が行われてこなかった台湾の民間の成人に対する日本語教育の現状を述べ、研究目的として(1)台湾の成人の日本語教室の実態を示す、(2)成人の学びを実現する教室のモデルを示す、という2点を設定した。最後に、本研究の対象である補習班がどのような機関であるのか、その特徴及び台湾の日本語教育における位置づけを示した。

第2章では本研究の先行研究として、教師の成長と役割、成人学習者という視点について、アンドラゴジー（成人教育学）の知見を踏まえてまとめ、成人の言語学習を解釈するために「投資」と「消費」という観点を示した。加えて、本研究の分析の視点である教室観という概念について「教室における文化・社会・文脈を構成・創造する要素を包括したもの」と定義した。次に、本研究の目的達成のために、研究課題として、1. 初任教师はどのように教室観を形成するのか、2. 中堅教師はどのように教室観を形成・変容させ、教室デザインを行うのか、3. 成人学習者はどのように教室観を形成・変容させ、学習を継続しているのか、という3点と、それぞれの下位の研究課題を設定した。

第3章では研究課題1. 初任教师はどのように教室観を形成するのか、を解明するために、2名の初任教师を対象にライフストーリー研究法を用いて調査・分析を行った。また、研究方法であるライフストーリー研究法についての研究手法及び先行研究も併せて記した。考察の結果、初任教师は前任教师と学習者との教室コミュニティに参加し、次に自身の教室観を実現する教室コミュニティを形成し、徐々に経験のある教師として教室観を形成していくことが明らかになった。また、教室観の形成プロセスは、初任教师が知識伝達をするような教師から「(教師の「師」がない) 教える人」

へと変容した2名と学習者との関係を構築するプロセスでもあることが確認された。

第4章では研究課題2. 中堅教師はどのように教室観を形成・変容させ、教室デザインを行うのか、を解明するために中堅教師1名を対象に複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて調査・分析を行った。併せて研究方法であるTEAについてもその理論的な背景や手順について記した。本研究では、中堅教師を「補習班で学ぶ成人学習者の特性について、経験を通して理解している教師」と定義した。それは、知識としてではなく、経験として成人学習者を理解する必要があると考えたからである。考察の結果、成人学習者を理解するプロセスは、教師と学習者という構図の捉え直しのプロセスでもあることがわかった。さらに個人と個人という関係性において、学習者と協働で教室デザインを行うことで、学習者内の「投資」と「消費」のバランスを取りやすくし、学習者の自己実現につながる教室デザインを行うことができることが明らかになった。

第5章では研究課題3. 成人学習者はどのように教室観を形成・変容させ、学習を継続しているのか、を解明するために、第4章で対象とした中堅教師の担当する教室に参加する成人学習者4名を対象として調査・分析を行った。研究方法には第4章で用いた複線径路等至性アプローチを用いた。考察の結果、仕事と趣味を目的とした成人学習者は日本語学習を「投資」から「消費」も含むものとして捉えるようになり、それは教室観を個人に帰属するものから他者との関係性に帰属するものへと変容させるプロセスでもあることが明らかになった。他方、趣味として学習をおこなっている学習者は、余暇活動として日本語学習を「消費」しており、教室観は学習初期より、一貫して他者との関係性に帰属するものであった。それぞれ、プロセスは異なるが、教室観の重なりは教室への参加継続を促進する要因として確認できた。ここまでの第3, 4, 5章の考察から、研究目的(1) 台湾の成人の日本語教室の実態を示す、については達成することができた。

第6章ではこれまでの考察から確認された教室観の構成要素をもとに、成人日本語教育機関における教師と学習者の教室観を構造化した。教室観は、教師は成長プロセスにおいて、学習者は学習継続プロセスにおいて、それぞれ異なる要因の影響を受けながら、経験として蓄積され中核的なものが形成されていた。また、その土壌として教師と学習者が教室参加者として対等な関係で相互交渉を行うことができる関係性の構築が必要であることが明らかになった。さらに、研究目的(2)の成人の学びが実現する教室のモデルを示した。その教室とは、「投資」や「消費」などの学びの対象を継続的に生み出すことができる教室であり、そこでは教師と学習者が対等な立場の教室参加者として、価値のある学びの対象を創造し続ける必要性を主張した。また、その際に教師は、設計者、監督者、構築者のどの立場で、どの役割を担うのかを問い続ける姿勢が重要であることを述べた。

第7章では各章をふりかえり、本研究の意義と今後の展望を述べた。本研究の意義は未だ議論が不十分である海外の民間の成人日本語教育機関における教室の実態を示した点である。大規模調査

では明らかにすることが困難であった補習班の教室について、教師と学習者双方の視点から、どのような教育が行われ、また求められているのかを明らかにした。さらに教師と学習者の教室観の構造を示した。これらの論考の結果、教室観形成には教師は成長プロセスと教室参加プロセスが、学習者は学習継続プロセスがそれぞれ影響していることが明らかになった。教師と学習者の時間の流

れの中で教室観を形成・変容させていくというのは、教室が継続する補習班の特徴である。このような知見は、成人の日本語教育に携わる教育者が多様な成人学習者が参加する教室の特性を理解するために有用であると考ええる。また、台湾の成人の日本語教室では、日本語学習を文化資本や知識の獲得のみを目的とした「投資」としてだけではなく、学習者間に価値観の重なりを生み、楽しめるような余暇活動としての「消費」としての側面も含んだ教室デザインが必要であることが示唆された。「投資」は学習者の未来に対しての価値を創造することであり、「消費」は学習者の教室参加という現在に価値を創造することである。このような成人の学びを実現する教室のモデルを示したことは、成人学習者の教室を考える上での基礎的な資料となるはずである。さらに、本研究は民間の成人日本語教育機関の教師のみならず、日本語教師養成課程の講師及び受講者や高等教育機関の教師にとっても、成人学習者の実態を知る上で有用な資源となる。

本研究においては海外の民間の成人日本語教育機関という場の特殊性として論じた。しかし、国内の高等教育機関においても、余暇活動として日本語を学習している留学生は少なからず存在するはずであり、増加する傾向にあると考えられる。そこでは、「投資」と「消費」の対象が学びの価値として存在する教室デザインが求められる可能性がある。このような状況下で、今後、教師には日本語教育の価値をどのように高めていくかが問われてくると最後に提言を述べた。